

パリにての特別研究期間の初期は、ちょうど翻訳がほぼ終了していた詩人・哲学者、ミシェル・ドゥギーの作品研究に充当された。ドゥギーの作品全般と、関連する一連の哲学的著作（主にハイデガーの著作と、ハイデガー関連の著作、ならびに解釈学やレトリック関連の著作）と文芸批評の精読が最初の課題だった。これらの著作からメモを取り、約30頁のフランス語の論文を作成した（現在未発表）。ドゥギー本人に論文を読んでもらい、貴重な指摘をいただいている。

後に、ドゥギーの訳書（「愛着」、2008年11月出版、305頁）の校正を、最後に著者本人との確認を交えながら進めた。

もう一人の詩人、ジャック・デュパンの作品研究をその後に再開した。ドゥギーの場合と同様、同様に、デュパンの作品と、関連する著作（ブランショ、マランその他）の精読、メモ作成の作業、そして詩人との何度もの会合を経て、23頁のフランス語の論文一本（現在フランスの専門誌で審査中）、及び約40頁のフランス語の論文（未完）を作成した。これらもデュパン本人に読んでもらい、貴重な指摘をいただいた。引き続き、この詩人の作品研究を進めるため、彼の草稿が預けられている *Bibliothèque Jacques Doucet* に通い、未発表の草稿やメモを転記する作業を進めた。これは今後の研究に役立つ予定である。

これらの作業は、特別研究期間に引き続き校務出張、*Venice International University* における講義準備のため中断された。講義は“*Introduction to Modern Art*”, “*Knowing the East : the Western poets and writers discovering Japan*”の二つであり、前者はパリ市内の近代美術館と付属図書館、後者は日本文化会館や *INALCO*（東洋語・文明研究機関）の付属図書館へ通うことで講義ノート準備が進められた。

特別研究期間の最後は、日本への一時帰国の途中で欧米数カ国の美術館を訪れ、美術史上重要な絵画作品を初めて実地に見学した。これはベニスでの講義に役立ったほか、科研費で進めている研究、「詩と造形芸術：二つのポイエーシスの対話」にとって極めて重要な意味をもった。